
影法師

翌檜.R n

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

影法師

【Zコード】

Z0268C

【作者名】

翌檜・R.n

【あらすじ】

「アイツ」は私を真似してくる。私も真似させられる。私の何をかもを。そう、人の死すら。

私は、アイツが嫌いだ。

アイツは、何故か分からぬけど、私の真似をする。

まず、容姿。

私が、髪を結んで来たら、アイツも全く同じ結び方をしてくる。髪を切れば、全く同じように髪を切つて来る。

こつそり、ネックレスをしてくれば、アイツはわざと私に見せつける様に、シャツの第一ボタンを開けて、私が付けていのと全く同じネックレスを曝す。

その他にも、弁当箱、靴、筆箱、シャーペン、そして私が手作りの動物の刺繡がしてあるハンカチを持つくれば、どうやってか、全く同じ物を手に入れて私にわざわざ

「お揃いだね」と言つて来る。

初めのうちは、どうでもいいと思い、無視をしていたが、そんな事を延々と続けられると、さすがに頭に来る。

だから、ある時言つてやつた。

「アンタさ、なんであたしの真似するわけ?かなりさ、不快だからやめてくれない?」

すると、アイツは

「別に真似なんかしてないよ。『たまたま』同じなんだよ。全く…人聞きの悪いこと言わないで欲しいなあ」

そいつの間延びした声にカチン、と来た。

パンツ！！！」

気がついたら、私はアイツを思いつきり平手で打っていた。アイツは、頬を押さえながら尻餅をついた。

「最低ッ！！！」

別に、殴った事は後悔していない。アイツは、私に殴られるような事を、したのだから。

だから、殴られて当然だ。

けれど、その日の夕方、私はアイツを殴った事を後悔した。

私が、友達と分かれ、薄暗い道を歩いていた時、突然、私の横を通り過ぎた人が、私の頬を平手で叩いてきた。

「キャッ！！」

その力の強さに、私は尻餅をついた。

しばし、何が起こったのか、分からなかつた。ただ、口の中に広がる、鏽び付いた鉄の味がする、血と頬の痛みだけがはつきりしていた。

季節外れの、長いコートを着て、サングラスをかけ、マスクをしている、その人は、しばらく私を見下ろしていたが、キッと踵を返し逃げ出した。

その時の頬の腫れは、尋常じゃなかつた。

翌日、頬に湿布を貼つた私の前に、アイツが来た。

「どうしたの、頬」

私と、同じ位置に湿布を貼るアイツを私は、恐怖した。

昨日のは、こいつだ

そして、しばらく時は経つ。

その間にも、アイツの私の真似は、続いたが、私は「あの日」の事を思い出し、何も言わなかつた。

そんな ある時、私の母が交通事故で死んだ。
信号無視のバイクに轢かれたそうだ。

私は、突然母を失った、事が信じられなかつた。
そんな、空虚な私に友達が、こんな事を言った。

「ね、ねえ… 今日さ、アイツの母親がバイクで轢き逃げに遭つて、
死んだんだつて……。これつて……どう、思う…？」

その事を言つてくれた、友達は、アイツが私の真似をしてるのを知
つてゐる子だつた。

私の母が事故にあつた日の翌日だつた。

何？

どう思つ?

そんな事、知らないわよ。

「レはナニ

ナンデ、一日続ケテ、マツタク同ジ様ナ事故ガ起コル

？

……私は、ある恐ろしい結論に至った。

「真似

マネ

イミテーション?

気が狂いそうだった。

アイツは、しばらく私の前に姿を現さなかつた。

しかし、私の方は限界が来ていた。

私は、アイツの家を調べた。

アイツに真相を問い合わせつもりだ。

私は、調べる。

……あつた、ここだ。

ABCマンション 3 2階室。

H

A B C マンション 3 2 号室 ？

それは、私の住む、A B C マンション 2 3 号室の上の階だった。

私は、すぐさまアイツの家に行く。

一応、護身用にナイフをポケットにいれた。

階段をかけあがり、3 2号室のドアの前に立つと、チャイムをならす。

すると、程なくしてドアの向こうから「誰?」といつ声が聞こえた。

私が、答えようとした時、「ああ、キミか。入っていいよ」と言われた。

私は、言われたとおり、ドアを開いた。片方の手では、ナイフを握りながら。

「何……よ。これ……」

アイツの家の中は、私の家と全く同じ家具が、全く同じ位置にあつた。

私は、さつきから顔を見せず、窓の外を見て居る、アイツを睨む。

「前にも、聞いた事あるけど、なんでアンタ私の真似をするわけ?」
アイツは答えないが、私は続ける。

「この部屋にしたって、どうやって、私の家と同じにしたのよ? 私、アンタを部屋に入れた覚えはないんだけど」

区切りを置く。

そして、言つ。

恐る恐る。

「あとも、アンタの母親死んだよね?……私のお母さんが死んだ次の日に、全く同じ死に方で。……なんなの、あれ。アンタさ、まさかさ……」

そう言つた瞬間、アイツは振り向く。

私は、アイツの顔を見た瞬間、心臓が止まるかと思った。

そこには、私と寸分違わぬ、全く同じの顔だった。

一卵性の双子より似てるだろ?」

「どうかな？キミと同じ、母親が死んだって境遇になるために、母さんをバイクで轢いたんだけど、その母さんにかかっていた保険料で、整形したんだ。よく似てるだろ？~闇の業界で、最高の腕を持つ、闇医者に頼んだら、性転換までしてくれたよ」

私は、そいつの胸にあるはずのない膨らみを見て、絶句した。

「なんなの……アンタなんなのシッ！？！」

私は、半狂乱になつて喚き散らす。

「決まつてるじゃないか。キミを愛してるんだよ。キミを誰よりも愛しているから、キミにだつてなりたいんだ」

そつまつて、アイツは、ヒタヒタと私に近付いて来る。私の顔で、微笑とも冷笑ともとれる、引きつった笑いを浮かべながら。

「ああ、もつとキミを見せて……」

「い、いやシッ！？」私は、叫びナイフを出して構える。それを見て、アイツもポケットから、鈍色に光るナイフを取り出した。

「やめて……」

「やめて」

「いやあ……」

「いや」

「来ないで」

「コナイテ」

「ニヤアあニツツツ……」

生暖かい、液体が私の手を濡らす。そして、ニヤニヤ
アイツは、笑う。

「キリも、真似したことね

(後書き)

今度夏にあるらしー、夏ホラー小説の練習に書きました。

ホラーを書くのは、初めてでしたが、どうだったでしょうか？

感想をお聞かせ願えたらうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0268c/>

影法師

2010年10月11日12時03分発行